

記号論：意味に焦点を当てて

梶原秀夫*

0. はじめに

「世界は記号である」という命題 (proposition) ¹⁾ を提示されたら読者諸氏はどのような理解をされるであろうか。一体記号 (sign) とは何であろうか。記号とは人間存在以前から存在しているものなのか。記号理論に関しては様々な見解があるが、Eco (1976) は「一般記号論の輪郭として考慮すべきことは、(a) コードの理論、および (b) 記号生産の理論である。後者では、日常的な言語の使用、コードの進化、美的伝達、さまざまな型の相互作用的伝達行動、世の中の物事について言うための記号の使用、などといった広範な現象が考慮の対象となる」と記号のあらゆる場合を扱う一般言語理論のことを説明している。この問題は言語起源論 (glottogony) に関係していて、Herder (1959) が「人間は自由に思考する活動的存在であって、その力は漸進的に作用しつづける。それゆえに人間は言語の生物である」と人間と言語記号の関係を述べているように、人間がいかにして猿のような動物的レベルから理性を持った人間へと進化を遂げたのか、という人間存在の本質に関係しているようである。

この命題を理解するためにはまず使用されている「世界」(world) という単語 (word) の概念と「記号」(sign) という単語の概念 (concept) ²⁾ をきちんと認識しておく必要がある。筆者がここで用いる概念という用語はすでに世界で共通かつ統一された意味を有する物事^{ものごと}の言語記号のことである。一つの用語記号を用いた場合にその都度多くの人が様々な認識をしていては、発話者の意図する意味が聞き手に正しく伝達されるのは不可能である。あらゆる専門会議においても用語の概念が統一されていないと様々な誤解が生じてしまうのがその理由である。この点「世界」(world) という語は、時には地球 (earth) という概念を共有しているにしても、誰もが容易に理解できる語である。しかし「記号」(sign) という単語は簡単なようで意外と厄介な意味化をする語である。

筆者はこれまでに用語 (terminology) については、世界中で誰もが同じ認識をすることができる統一した意味規定が必要である、と何度も提言している。「単語」(word) という用語にしても語彙 (vocabulary) ³⁾ という語と同じレベルで用いられる場合が多々あるようで、「単語のテストを行う」とか「語彙テストを行う」などの表現がその例である。単語という用語を使

*教授／言語学

用する際に文 (sentence) を念頭に置いて発話する人は果たしてどれほど存在するであろうか。語彙というレベルで単語という語を簡単に発話している人がかなり多いようである。単語という言語記号の概念は常に文中で「辞書的意味機能」と「文法的統語機能」を有している語である。このことが何を意味するのかと言えば、中学校や高校などの英語の授業で教師から「Lesson 1 ~ Lesson 5 までの単語のテストを行う」という指示が出されたならば、出題された各単語の意味はその出題範囲の中の各文の文脈に適した意味を解答することを求められていなければならない。解答者が出題範囲以外の別の文脈でしか通用しない意味を解答した場合は、教師は厳密にはその解答を不正解にしなければならないのである。そこまで詳しく単語テストを指導し、かつ答案の解答作業を行っている英語教師は果たしてどのくらい存在しているであろうか。言語記号の意味はこのように厳密な分析が求められることが重要である。

ここで記号 (sign) という言語記号の概念 (concept) に話を戻すと、この用語に関しては言語哲学 (philosophy of language) や現象学 (phenomenology) や言語学 (linguistics) などで論じられているが、大きな分析をするならば記号は唯物的に独自に存在しているものなのか、それとも唯心的に人間が存在して初めて命名された言語記号なのか、の二つの見方があると言える。前者の見方は自然界そのものであって、例えば「朝焼け」とか「夕焼け」という現象は人間存在に全く関係なく生じていて、言うなれば太陽系の中の地球を取り巻く自然現象と称する記号である。人間は経験から「朝焼け」がしたら「雨になる」とか「夕焼け」がしたら「晴天になる」と自然界の記号を読み取っている。これに対して後者の唯心的な見方はまさに言語記号のことで、人間が物事に名前 (name) を付けて記号をコード (code) 化したもので、当然のこととして記号の発信者 (encoder) と受信者 (decoder) の間にはその記号の有する統一した概念の認知が必要である。この記号に対する統一した概念を持たないと言語による意味 (meaning) の伝達 (communication) は不可能になる。

これまでに筆者が何度か提示している「文」(sentence)⁴⁾の定義を参照していただければ幸いであるが、多種の辞書を見れば容易にわかるように「文」の定義は全く統一されていなくてその説明は千差万別である。その結果正鵠を射ていない分析が多くなっている現実を筆者は心から残念に思っている。その例を示すためにここで少し紙面を割くことを許されたい。

日本語の分析の際に必ず問題となるのは助詞の「は」と「が」の説明である。前者は副助詞で後者は格助詞と分析されていて、特に三上(1960)の「象は鼻が長い」という文の分析が有名である。三上⁵⁾は「象」は副助詞の「は」が付いているから主語ではなく「主題」(＝「話題」)で、主語は主格を表す格助詞の「が」がついている「鼻」であると分析している。筆者はこれは完全に間違った分析であると主張している一人である。従来の学校文法でも「は」は副助詞で「が」は格助詞であると説明されている。このような正鵠を射ていない分析はどこに起因しているかと言うと上記で述べているように「文とは何か」の統一した定義が存在しないからである。「象は鼻が長い」の文は誰が考えても「象」が主語であるはずなのにまったくおかしい分析をする文法家が世の中にはかなり多く存在している。その点「文とはある対象物

の状態（静態・動態）を説明する際に必要な文法構造で、主部と述部から成り立っている」という統一した定義が存在すれば、この文は「象」が対象物であり、しかもその対象物の状態を説明しているので必然的に「象」が主語であると断言できる。

以上の序論で述べてきたように、人間が言語で世界を切り取る際には「記号」(sign)と「意味」(meaning)との関係が統一して認識できることが重要である。本論文では人間がいかにして記号を駆使して自然界を科学的に解説しているかを哲学的に考察し、さらに「記号」と「概念」と「意味」という用語の定義を試み、その結果として「宇宙は記号である」という命題を確立することを本論文の目的としたい。

1. 記号論 (semiology) について

最初に筆者が用いた記号論 (semiology) という用語は記号学 (semiotics) の上位区分にあることを認識されたい。記号論とは文字通りに解釈すれば記号 (sign) と見なされる物事すべてを研究する学問である。すでに序論の中でも触れているが、人間の存在に関係なく自然界のすべてが記号であるとする唯物的な思考方法をする相対的な記号論も可能であるかもしれない。また人間が存在して初めて言語記号による伝達が可能になるとする従来の唯心的な記号論も可能であるのは言うまでもない。後者の記号論は誰もがすぐに理解できる言語そのものに関する学問であるが、前者の記号論は具体的にどのような事なのか理解に苦しむ人も多いに違いない。この問題は根本に意味の問題を含んでいるので、記号について論ずる際には必ず意味についても論じなければならなくなっている。しかも物事の真理に近づくためにはどちらかと言うと唯物的に物事を相対的に見ることが重要である。この件についてはこのあとの「記号の独立性」という項目で筆者の意図している分析方法を述べさせていただきたい。まず記号とは一体何のことなのか、自然界の何が記号化されるのか、それはすでに独立して唯物的に存在しているものなのか、すべてコード的で分節によって永遠に創造可能なものなのか、記号を分析するなどという表現は可能なかどうか、宇宙は記号なのかどうか、などという諸問題を「記号」と「概念」という用語の定義を目的に順次論じていくことにする。当然のこととして「意味」とは何かの定義も項目を改めて提示したい。

1.1 記号の独立性

この項目のタイトル自体に読者諸氏は不審を抱いているかもしれない。その理由は人間が存在して初めて「記号」などという言語記号が可能であるからである。まさにその通りであると言える。しかしここで筆者が論じたいのは、何が人間の知覚機能に影響を与えているのかをより客観的に把握するために敢えてこの項目を設置していると理解されたい。つまり自然界の物事を認識するにはどのような思考方法をすればより真実に近づくことができるかの哲学的な問題を最初に提起しておきたいからである。

この自然界には多種多様の生物が生存している。個々の生物はそれぞれの知覚機能を使って自然界を認識しようとしている。人間の視覚に入らない細菌類や嗅覚の発達した動物や夜中でも見える視覚の発達した動物や空中を飛べる能力のある動物や聴覚の発達した動物などは人間が所有していない知覚機能を駆使しながら生存を続けている。人間も視聴覚機能は所有しているが空を飛んだり、暗闇でも物が見えたり、嗅覚が鋭かったり、チータのように速く走ることができたり、などなどの能力は所有していない。そのように特別な能力を所有していない人間に自然界はどのような刺激を与え続けたのであろうか。猛獣に襲われたら逃げ足の遅い人間はすぐに食い殺されてしまうだろう。と言って人間は襲撃してくる相手に歯向かう鋭い牙も爪も角もチータのような速い足も所有していない。擬人化した表現をするならば、おそらく自然界は人間に手を使用するように働きかけ、手を使うということは必然的に四足で歩くのではなく両足で立って歩くように進化させたのであろう。さらに両手の使用は脳細胞を活性化させて狩猟などの際に合図に音声記号を使用するようになり、やがてはその音声記号も視覚的に合図伝達ができるために文字の発明へと自然界は人間を記号の世界へと追い込むのである。

このように記号の世界に人間を追い込む力は一体何なのだろうか。筆者はこれを唯物的に宇宙のエネルギーだと断言したい。つまり「人間は宇宙のエネルギーの一部である」と人間を定義づけたい。この点 Kwant (1965) の表現にも「たしかに人間は、宇宙と呼ばれる力の巨大な因果作用の部分でもある」と宇宙のエネルギーにちょっと触れているところがある。とにかく筆者は「人間は宇宙のエネルギーである」という哲学観を長い間抱いている。

ここで「月の石」の存在にも触れておきたい。唯心論者は人間が月に到達してそこに石が存在しているのを「人間が見届けて初めて月に石がある」と言うだろう。しかし唯物論者は人間が月に行っても行かなくても「石は独立してそこに存在している」という思考方法をして、人間がその石を見てもそれは石の方が人間の知覚に作用することになって、人間は石の存在をその瞬間知覚せざるを得ない状態にさせられていると考えているのである。人間がその月の石を見た瞬間に人間は「認識という記号の世界」に踏み入ったことになる。筆者はこのように人間の存在と自然界の存在を唯物的かつ相対的にみていくことが物事の真実に近づくために重要なことだと考えている。

1.2 記号のコード性

このコード (code) という用語もきちんとした定義が必要である。つまり記号 (sign) と概念 (concept) と意味 (meaning) とは違うのかという問題である。この項のタイトルも前の項のタイトルも容易に理解できる内容に見えるが、論者の説明が無いと簡単には理解しにくい側面がある。例えばコード (code) とは記号のことではないのか、と問われたら読者諸氏はどのように答えられるだろうか。また物事の名前 (name) との違いは何かという質問もある。どちらもそれ自体の概念を有しているので記号であることには間違いない。ただ記号が自然界のすべてを含むのに対して、つまり「朝焼け」などの自然現象もすべて含むのに対して、「名

前」や「コード」は「記号」の下位区分にすぎない。「名前」(name)はある対象物の共通した概念的な存在である。その点「コード」(code)は名前のように一般的な概念的な存在のレベルに留まっていることはできないと筆者は考えている。しかし従来の言語学ではコード (code) という用語は Saussure の記号に対する分析に大きな影響を受けていて、言語記号の恣意的 (arbitrary) な特徴、記号の意味するものとしての能記 (signifiant) と意味されるものとしての所記 (signifié)、個別言語の体系としてのラング (langue) と具体的に発話された音声の連続であるパロール (parole)、などの分析用語がある。Martinet は特にラング (langue) とパロール (parole) の関係をコード (code) とメッセージ (message) の関係としている。たしかに広義の意味では世界の個別言語はすべてコード (code) であるとも言えるかもしれないが、筆者はコード (code) という用語はもっと狭義の意味で使用すべきであると主張したい。暗号文や信号を想起すれば容易に理解できるように、我々が常日頃いとも簡単に使用している「コード」という用語は、通信 (message) や信号 (signal) やその他何かの秘密を重視した場合に使用する用語で、送信者 (encoder) とその解読者 (decoder) の両者にしか理解できない記号なのである。次に言語記号の創造について少しの紙面を割くことを許されたい。

1.3 分節による記号化

人間が自然界のすべてのものに命名 (naming) できるのは何故なのだろうかと読者諸氏も一度は考えられたことがあると察する。人間はほんとに不思議な生物である。人間は鳥のように空を飛んだり、象のように聴覚の鋭い大きな耳を持っていたり、犬のように鋭い嗅覚を持っていたり、蝙蝠のように暗闇の中を超音波で飛び交うことができたり、チータのように地上を高速で走ることができたりする機能は所有していない。しかし言語という触覚を所有するようになり、自然界のすべてを記号化すると同時に、自らも記号の一部となり、記号としての自然界を宇宙のエネルギーの一部となってあれこれと引っ掻き回しているのである。人間は「無限」という概念を認識するために宇宙の「大爆発起源論」(Big Bang) という説を生み出して、宇宙は大爆発後に光の速さで膨張を続けているという認識を試みている。しかしそれにしてもその大爆発はどこに向っているのかという疑問が湧いてくる。そのように考えてしまうと再度「無限」について悩むことになる。目下のところ宇宙は大爆発中であるとすれば心が休まるのである。

もし人間が自然界の対象物を分節 (articulation) によって記号化できなかつたらどうなっていたであろうか。当然の帰結として言語による自然界の記号化は不可能であり、同時に人間という生物の誕生も存在できなかったであろう。Martinet が指摘したように、人間は最初の対象物に最小の意味あるいは概念を持つ形態素 (morpheme) という記号を与えて、さらにその分節された記号は音素 (phoneme) という記号で無限に創造できるようにする二重分節 (double articulation) という記号化を生み出したのである。人間がどのようにしてそのような二重分節 (double articulation) を用いて無限に自然界を記号化するようになったのかはまさに言語起源

論であり、その議論は様々で最後には「最初に言葉ありき」と聖書で指摘しているような言語神授説も登場してくるほど難しい問題である。宇宙も地球も人間もすべて神様が創造したのであるとすれば話しは簡単で議論の余地も無いのである。言語起源論の学会が中止に追い込まれたのも容易に理解できる。いずれにせよ人間は無限なる宇宙に対して無限に記号創造できる二重分節 (double articulation) という記号創造機を用いて、認識が不可能に近い「無限」という記号の概念に対しては「大爆発起源論」(Big Bang) という記号を駆使して認識の極限に迫っているのである。このような思考をしてみると宇宙それ自体の存在が不思議であり、無限で広大な宇宙の中のほんの一部である銀河系にさらにその一部である太陽系が存在し、しかも目下のところ地球だけに高度な文明を創造していく人間が存在していて、しかも人間が100億光年や1000億光年も遠く離れている星座を発見して電波を送信しているのに、未だに他のどこからも地球への応答は届いていないのである。唯心的な見方をするならばこの宇宙には記号を駆使する生物は人間以外に存在していないのかもしれない。

1.4 記号 (sign) とは何か

記号という語から読者諸氏は何を連想するであろうか。多くの人は文字のように視覚的に認識されるものを思い浮かべるのではないだろうか。伝達 (communication) ということを目的にすると音 (sound) も光 (light) も記号の範疇に入れることが可能である。

池上 (1984) は「人間は、すでに慣習的に定められた記号をあやつるばかりではなく、新しい記号をせっせと作り出しているのである。現代の記号論がとりわけ関心を寄せる記号とは、実はむしろこのような記号なのである。……現代の記号論では、記号ということばの代わりに記号現象といった用語がよく使われるが、これもそのような点を考慮してのことなのである。このように考える場合、いちばん基本になることは人間の「意味づけ」とでもいった行為——つまり、あるものにある意味を付したり、あるものからある意味を読みとったりする行為——である。人間が「意味あり」と認めるもの、それはすべて記号になるわけであり、そこには記号現象が生じている。この言語創造にも似た行為を、人間は絶えず、しかもその文化のあらゆる面で行っている。その原型と本質を探ってみること——そこに現代の記号論は関心を向けるのである。人間の「意味づけ」する営みの仕組みと意義——その営みが人間の文化をいかに生み出し、維持し、そして組み替えていくか——現代の記号論はこういうことに関心を持っていると言いかえてもよいだろう」と記号論についての見解を示している。

上記の池上の記号に関する説明はかなり正鵠を射ていると言える。特に「言語創造」という表現で記号を相対的に流動的なものとして捉えている点は筆者も同じである。池上の説明の背景には、人間は言語による伝達を基本にして社会を構築していることが前提にあり、さらに Barthes (1967) ⁶⁾ の記号分析のように人間の生み出す文化そのものも記号であると見ているようである。とにかく容認できる記号の説明である。しかし池上 (1984) が「記号」と「記号機能」という用語を言語創造の観点で使用し始めると、特に後者の「記号機能」と「概念」と

「意味」との相違が明示的でなく、きちんとした用語の定義が必要になってくる。少し引用が長くなるが以降に提示するので紙面を割くことを許されたい。

池上（1984）は「記号」と「記号機能」という項目の中で、「あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表わしている時、その働きは「記号機能」、そしてその働きを担っているものは「記号」と呼ばれる。コードに基づくコミュニケーションの場合は、メッセージを構成するのに用いられる「記号」はもともとコードに定められているわけであるから、このような場合には何が「記号」であり、何が「記号」でないかはきわめて明瞭である。このような場合は、「記号」の概念が「記号機能」の概念に優先しているように思える。モールス信号の「トン・ツー」はコードに記載されているから「記号」であり、コードの規定に従って日本語なら（イ）、英語なら（a）を表わすといった「記号機能」を果たす。これに対し、「推論」型のコミュニケーションでは、必ずしも「記号」がもともと存在しているのではなくて、当事者が自らの主体的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表わしている（つまり、そこに「記号機能」が存在している）と認定する。その瞬間にそのものは「記号」となる。ここでは、「記号」の概念よりも「記号機能」の概念の方が先行することになる。このやり方で、人間は事実上すべてのものを「記号」にすることができる。人間はすべてのものにことばを与えることのできる創造主なのである」と分析している。

これらの分析の中で池上が使用しているキーワードは「記号」と「概念」と「記号機能」である。筆者がこれまでに何度も提示しているように用語の統一した定義が存在しないと、何かを論じていても話し手と聞き手の間に微妙な相違が生じてしまい、重要な論点を相互に理解できない場合がある。この場合も「記号」という語を多くの人はどうのように理解しているのか、「概念」とは「意味」とどう違うのか、「記号機能」とは本来存在しているものなのか、などという疑問を持つ人が多いに違いない。池上は「あるものが別のあるものの代わりとしてそれを表わしている時」とかなり明示的な説明を試みているが、その説明の根底にはすでに人間が「あるもの」を意識していて知覚しているという前提が必要である。つまり「あるもの」は唯物的に独立して存在しているものに対して、「別のあるものの代わりとしてそれを表わしている時」とは記号自体が独立して別のものに変化しているのではなく、人間が別のものに代えているのであって、まさに人間の知覚認識なくしては存在しない唯心的な記号の側面を語っているのである。とすると「記号機能」という用語は本来存在できない用語であって、記号そのものが機能を有しているとは絶対に言えないのである。筆者が序論で「単語とは二つの機能を有している」と述べているのは、一つは辞書的機能で、もう一つは統語論的に文法的機能を有しているからである。記号は単語とはまったくレベルの異なった存在であって、単語は文という小さな次元の中で機能できるのに対して、記号は「世界そのもの」あるいは「宇宙そのもの」であって「機能」という用語のレベルを超越しているのである。

さらに池上（1984）は「意味」という用語を使用しないで、「記号の概念」とか「記号機能の概念」という表現で「概念」という用語を用いている。それは誰もが同じ認識をしていると

いう前提で用いるからである。池上もそのような前提でこの用語を用いているのは言うまでもない。何かを論じようとする場合に、数式なら正誤がすぐに検証されるが、用語の問題になると数学や物理学などと違って、言語関係は用語の持つ概念が人それぞれに認識が異なる場合が多いから相互の理解が大変である。池上が簡単に「概念」という用語を用いているのも当然のことなのである。筆者も特別な場合を除いて全部の用語にその都度定義を加えて使用しているとは言えない面がある。ここで指摘したいのは「記号」という用語の概念も然りだが「記号機能」という用語の概念は果たして認知されているのだろうか、またその認知は統一された定義として認知された概念なのだろうか、という問題が重要なのである。筆者には「記号の機能」という表現はまったく容認できない用語であって、記号はそれ自体独立して機能を有しているものではないと考えている。このことは常にどこかで生じている問題であって、用語の統一された定義が無い場合が多いため誤解が誤解を生んでしまう論議が多く場で生じているのが現状である。

読者諸氏は「記号」(sign)と「名前」(name)の違いを直ぐに説明できるとお考えだろうか。簡単ではないと思う方が多いのではないだろうか。言い換えた質問をするならば、「記号化する」と「命名化する」との違いは何かということである。筆者はこの質問に対して前者は「自然界全体に対する人間の感覚的かつ理性的な認識行為」で、後者は「言語だけによる人間の理性的な認識行為」であると分析したい。そこで「概念」(concept)という用語のことであるが、ある対象物の概念がその対象物の特定した要素のみを指示するのではなく様々な要素を総称して指示しているとする Sapir (1921) の分析や言語記号を主体として能記 (signifiant) と所記 (signifié) の関係から概念を説明している Saussure (1916) の分析などは両者ともかなりの的確さはあるが、筆者はまだ物足りなさを感じている。「概念」という用語はもっと奥深いもので、本来は統一された概念を人間全員が所有することは不可能かつ存在できないものであると考えている。自然と人間との関係ですでに序論でも例示しているように、早朝に「朝焼け」の空を見たら午後になって「雨が降る」という認識を人間が長い経験からそのようにしているならば、言語とは全く関係なく自然界の「朝焼け」という現象は人間に「雨が降る」という「概念」を抱かせるので、その現象は「記号」にもなっているのである。山道を奥深く行く場合も然りで、途中に岐路が3つあった場合に目的地への道の入り口に大きな樫の木が立っていれば、大きな樫の木が目印として人間の脳裏に焼きついてすでに道標と同じ役割を持っていることになり、まさに人間がその「樫の木」を概念化しているので言語でなくても立派な「記号」になっていると言える。視覚的だけではなく聴覚的や嗅覚的な現象も然りである。横断歩道でよく耳にする盲人の方たちのためのメロデー音や警察犬が犯人を追跡する際の体臭も記号である。このような自然界の現象をも人間は記号化していることを再認識する必要がある。そのような意味で簡単に「記号」とか「概念」という用語を使用できない場合があることを筆者は主張したいのである。

池上 (1984) の記号論の「記号がもともと存在しているのではなくて、当事者が自らの主

体的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表わしている（つまり、そこに「記号機能」が存在している）と認定する。その瞬間にそのものは記号となる」という表現は Peirce (1981)⁷⁾ の記号論を想起させる面がある。

Peirce (1981) は「第一に記号とは何らかの点であるいは何らかの能力で、誰かに対しほかの何ものかを「表意する」(stand for) ものを言う。第二に、「表意する」という作用——すなわち記号作用、記号過程 (semiosis) ——は三つの要因または側面から成り、その要因はいま引用した定義のなかでパース自身がイタリックで示したもの——レプレゼンタメン、解釈内容、対象——である。そして第三に、記号 (sign, representamen) は解釈内容 (interpretant) をいわば媒介にしてほかの何ものか、その対象 (object) を表意するが、このように記号とその対象を関係づける解釈内容もそれ自体記号である。解釈内容とはつまり記号が誰かに話しかけ、その人の精神のなかに生む「それと同等の記号、または多分もっと発展した記号」である」と分析している。

上記の Peirce (1981) の説明にあるように、パースの言う記号とは「何らかの点であるいは何らかの能力で、誰かに対してほかの何ものかを表意する (stand for) もの」という表現と「記号は解釈内容をいわば媒介にしてほかの何ものか、その対象を表意するが、このように記号とその対象を関係づける解釈内容もそれ自体記号である」という表現をしている。これに対して池上 (1984) は「記号はもともと存在しているのではなくて、当事者が自らの主体的な判断に基づいて、あるものが別のあるものを表わしている（つまり、そこに「記号機能」が存在している）と認定する。その瞬間にそのものは記号となる」という分析表現をしているので、パースの分析が先駆的な内容になっているようである。つまり少なからず池上はパースの影響を受けているようである。しかし両者の間には根本的に異なった用語が用いられている。パースの「解釈内容」という人間の知覚能力を表わす用語に対して、池上は「記号機能」という用語を使って非人間的な記号自体が有している機能という分析をしてしまっている。パースの分析が点数にして 100 点の正鵠を射ているとするならば、池上の分析は 80 点くらいに減点されてしまうだろう。記号は人間が自然界のあるものを解釈して概念化した心の中の内容物であって、記号はもともと存在しているものではなく、人間が意識して初めて実存するもので、当初から機能などは所有している存在ではないのである。池上の「記号機能」という表現を人間を主体とした「知覚機能」という表現に代えたならば満点の分析点を獲得できたと言える。まさに記号を論ずることは世界や宇宙を論ずることに繋がっていて、記号論は哲学論でもあって、記号の下位区分である言語を論ずることは人間を論ずることになる。何かを論ずる際に必要なことは、論者は自分の分析が聞き手または読者により深く理解してもらうために、絶えず的確な用語の使用方法を工夫することが重要である。

Peirce (1981) は人間の存在について「存在 (being) とはわれわれの認識と思考の対象であり、われわれの認識と思考の対象はすべて記号であり、ゆえに存在と記号は形而上学的に同じものである。すなわち存在は記号である」と表現している。さらに「すべての思想は記号であ

るという事実と、人間の生活は思想の連続であるという事実から、ゆえに人間は記号であるということが証明できる」という表現もしている。

上記のパスの記号論をみると、まさにそれは「人間とは何か」という言語起源論にも関係してくる難しい問題になっていて、しかも記号を概念化できるのは人間しか存在していないので、この問題は究極には「人間は宇宙の中でどのような存在物なのか」という哲学論に発展する要素を含んでいると言える。ここで「宇宙と人間」との関係を Kwant (1965) がサルトル⁸⁾の「内面化」という表現で解説しているので少しの紙面を割くことを許されたい。

Kwant (1965) はサルトルの「内面化」について「この語をつかってかれが言い表わそうとしたのは、世界の中で生きる時、われわれがこの世界をわれわれにとって意味あるものたらしめるということ、われわれが世界をいわば意味の場として専有するということであった。サルトルはすべての個人を世界の「全体化」とよぶ。個々の人間は世界を、彼自身のまわりにひろがる自分自身の実存の場として、世界を経験するほかはない。同時に、他人は他人で同じように自分が世界の中心だと感じていることを、人間はとてもよく承知している。わたしが他のひとびとをわたしの実存の場に帰属する要素として経験するように、他のひとびともまたわたしをかれらの実存の場のなかで経験する。厳密に言えば、これらのことはすべて人間が「主体」であるという事実のうちにふくまれている。たしかに人間は、「宇宙」とよばれる力の巨大な因果作用の部分でもある。家や木と同様に、人間は風の力をうける。爆弾が破裂すれば、その破壊的な力にさらされる。多くの人間が狭い場所にいっしょにいれば、各人の呼吸と体温で部屋の空気は息苦しくなってくる。われわれは宇宙とその膨大な力の相互作用の一部をなす。けれども、それだけのものではない。われわれは「主体」として、世界とそこにふくまれるすべてのものを、自分にとって意味あるものたらしめるものだから。われわれは世界の一部であると同時に、意味の場としての世界の中心でもあるのだ。サルトルが「内面化」ということで言おうとしたのは、このようなことである」と解説している。

上記の解説の中で人間は「世界を意味のある場」とするという表現はまったくその通りであると言える。この場合も使用している「意味」という語の概念を我々は共通している必要があるのは言うまでもない。言語による「意味」だけではないことをここで明確にしておきたい。後半の項目で「意味」についてさらに論ずることにしているが、本項目の内容は、人間は世界あるいは宇宙という対象物を「記号」という媒体によって個々にまたは相互に「意味化」を可能にできる生物である。すでに何度も「概念」と「意味」という用語を使用するように、筆者が本論文で主張している重要な論調は、人間が「記号」を人間の触覚として共有しながらいかに世界や宇宙を「意味化」しているかに焦点を当てることである。

何度も同じような用語の問題に触れてきているが、それでは「記号」と「概念」の定義はどのようにすれば正鵠を射ていると言えるだろうか。まさに哲学的な分析が求められているのである。読者諸氏は「記号」や「概念」という用語をどのように定義づけるだろうか。考えれば考えるほど難しい問題だと思われるにちがいない。

しかし本論文の目的は「記号」とは何かを解明し、「記号」と「概念」と「意味」の用語を定義づけることである。そこで用語の定義の分析が難しいことは百も承知で、敢えてここで筆者がこれら二つの用語に対する定義を試みることを許されたい。

「記号」の定義： 自然界のすべてを人間が認識しようとする際に、その都度対象物の概念を心象化したものを記号と言う。つまり概念が「静的心象」であるのに対して記号は「動的心象」である。「記号」という語自体は言語記号である。しかし記号の概念は言語だけではなく自然界のすべての対象物に対して存在するものである。記号の下位区分は言語、感情表現、知覚した自然界のすべての対象物などである。

註）『新明解国語辞典』（1988）三省堂

「記号」： その社会で意思伝達のために使われるしるしの総称。広義では言語・文字を含み、狭義では文字に対して符号を指す。

上記に引用した辞書の説明では、記号は人間間の意思の伝達のためにあるのを基本としていて、しかも広義という点で言語に焦点を当てた説明をしている。広義という点では「朝焼け」や「信号音」や「香り」などの自然界の視覚的かつ聴覚的かつ嗅覚的なものまで含めて人間は認識行為を行っていることを無視した解説で、記号の説明としては言語だけに焦点を絞ったむしろ狭義の説明になっていると言える。筆者がよく提示する「人間＝言語＝社会」という方式からも、上記の説明は「社会」と「言語」にのみ焦点を置いていて、「自然界」と「人間」との関係に焦点を当てた記号分析を試みていない弱点がある。「文」(sentence)の定義と同じく、辞書による用語の説明は千差万別で、一つの用語に対して常に同一の理解をし合うのは非常に難しいと言える。上記の辞書の説明で評価できる表現は「しるしの総称」という文言だけである。

それでは次に「概念」という用語の定義を試みてみたい。

「概念」の定義： 自然界のあらゆる対象物を認識するために人間が抱く心象現象のことで、人間相互の理解は共通した概念を持ち合うことで可能になる。記号の動的心象に対して静的心象である。

註）『新明解国語辞典』（1988）三省堂

「概念」： 「……とは何か」ということについての受け取り方を表わす考え。個々の事物の特殊性を問題にしないで、共通性だけを取り出して扱う様子。

上記の辞書の説明は「まさになんと申しましょうか」である。「受け取り方」という表現は

正鵠を射ているとは言えない。つまり受け取る方法ではなくて、事物に対して個々が抱く心象だからである。「共通性だけを取り出して扱う」という表現は、例えば「国旗」という語は様々な国旗も含んだ共通性のある言語記号であるように、かなり正鵠を射ていると言える。しかし筆者は「概念」という語は「共通性だけを取り出す」などということではなくて、どちらかと言えば Saussure の用語の「所記」(signifié) に該当すると考えている。

さらに説明を加えるならば、「概念」は人間が自然界の対象物を知覚した際の印象そのものであるのに対して、「記号」はその印象から判断または認識行動へと進もうとする心象のことである。

1.5 記号を分析するとは

読者諸氏は本論文の項目を見ておそらく面食らっていると察する。「記号の独立性」とか「記号を分析する」とか「宇宙は記号である」などの表現はそれ自体理解に苦しむ内容だからである。

記号 (sign) が言語だけを指しているのではないことはすでに何度も述べている通りである。北極の氷河が溶けたり、緑地が失われて砂漠化していく場所が増えたり、集中豪雨による災害が多くなったり、等々の自然現象は自然が示している記号でもあって、その記号を人間は真剣になって分析しなければならない。これらの自然現象は自然が人間に警告を発している地球温暖化という記号である。人間はこれらの現象を分析してその対策を緊急に考えねばならないことを認識しなければならない。

自然界の記号を人間が分析するのは一種の人間に与えられた本能みたいなもので、別の表現をするならば宇宙のエネルギーの一部である人間というエネルギーは自然界の法則を唯物弁証法⁹⁾的に解釈 (decode) して行かねばならないのである。太陽の周囲を地球がいくら回りたくないと主張してもどうしようもないように、人間は自然の法則で自然界の法則を絶えず解釈 (decode) しなければならない宿命を帯びているのである。

人間が野山を石斧を持って狩猟していた時代から自然界の記号を解釈してきて今やロケットを飛ばす時代を迎えるようになってきている。テレビ電話や携帯電話などSFの世界だったものが現実になって子供も大人も当たり前のように文化製品を使用している。なぜこのように人間は科学的に進化を遂げているのであろうか。言うまでもなくこれは上記で述べているように、人間は宇宙のエネルギーで、しかも唯物弁証法的に言えばそれは常に同じ状態であることが自然の法則で不可能になっているからである。宗教の世界では周囲の環境がどうであれ毎日心だけを安定させようと祈っている唯心的な考え方をする人間が多い。さらに地球温暖化というように自然界が危険な記号を提示しているというのに宗教戦争や土地や資源を取り合う戦争を人間は愚かにも続けているのである。親子や兄弟でも殺しあっているように、人間は常に個々の動きを重視してしまう本能があるらしく、教育やしつけで理性の訓練をしても本能には勝てないであれこれと争いを続けてしまっている。科学者たちは20億年くらい立つと太陽が膨張

して大爆発を起こし太陽系が一瞬にしてガス状態になってしまうことをすでに予知している。人間がロケットを飛ばしているのも本能的にそれを予知したエネルギーの動きであって、やがては光の速さで飛ぶ飛行物体を発明して他の惑星へとエネルギー移動をしていくのかもしれない。それを言い換えるならば自然界という記号を人間は解読しなければならない解読者（decoder）としての宿命を地球誕生の時から、あるいはそれ以前から宇宙のエネルギーの一部としてすでに帯びているとも言える。

自然界の記号分析に対して言語記号の分析にも少し触れておきたい。これは「言語獲得」（language acquisition）に関する問題である。この言語獲得の問題については Chomsky（1965a）¹⁰⁰の「言語生得説」（innateness hypothesis）が有名である。つまり人間は生まれながらにして言語記号を解読する能力を所有しているとする仮説である。筆者もこの段階では彼の仮説に賛成であるが、ではその分析能力が何であるのかと問われた時に、彼はその分析能力は統語的な文法能力で、しかも世界中の言語に共通する「普遍文法」（universal grammar）であるという仮説には賛成し難いと考えている。もっと明確に言うならば世界のすべての言語に共通する文法を構築するには無理があって不可能と言っても過言ではないということである。では人間に共通する言語能力とは何かと言えば、すでに梶原（1997 / 1998 / 2003）¹⁰¹が提唱しているように、それは人間の脳細胞の中には遺伝的に組み込まれている「記号知覚装置」（SPD = sign perception device）¹⁰²という装置があって、それが作動して初めて人間は「自然界の対象物には名前がある」ことを認識できるのである。言語の統語的（＝文法的）な能力を高める以前に、「物や事には名前が付いている」と認識することが先決で、人間はその能力を生得的に所有していると断言できる。その「記号知覚装置」（SPD）にスイッチが入ってから初めて人間は自然界の記号を分析できるのである。表現を変えて言うならば、人間は自然界という記号を分析できる「記号知覚能力」（SPA=sign perception ability）を生得的に所有していると言える。

1.6 宇宙は記号なのか

すでに前項で論じたように、人間が宇宙を知ろうとすればするほど宇宙は記号で満ち溢れていくと言える。「人間の実存」という表現をすると唯心論的な側面が強くなるが、「人間の存在」という表現をするとかなり唯物的な面が濃くなる。前者の唯心論的な側面とは、「実存」という表現が「実存主義」という哲学観とすぐに結びつき、事の真実は「神」や「神や無との間の中間者」や「超越者」や「聖なるもの」や「人間自身」が決めるとする観念論的な見方をしてからである。後者は自然界と人間を相対的に見る唯物弁証法的な見方で、その思考方法は「記号（sign）は人間誕生と同時に発生し、記号という物的な存在はすでに現状のままではいられない矛盾のエネルギーを含んでいて、宇宙と人間は相互に記号という範疇の中で絶えず変化の道を進んでいる」という客観的な認識方法を可能にしているからである。

記号（sign）とは、それが概念を含んだ物体とするならば、その物体はそれが自然現象の象徴（symbol）であれ、言語の象徴であれ、それが生じた瞬間にすでに人間に何らかの認識行為

(=記号解読行為) を起こさせていると言える。万物はすべて一瞬たりとも同じ状態であることが出来ず絶えず刻々と変化の動きをしている。すべての記号も同様に絶えず動きを伴っているのである。つまり「地球」や「花」や「星」や「海」や「山」や「空」や「雲」や「社会」や「建物」や「肉体」や「愛」などの記号はすべて刻々と変化しているのである。このように永遠の変化と動きを有しているのは、宇宙そのものが絶えず変化しているエネルギーだからである。人間はこの変化している自然界を記号化し、同時に自らも現状ではいられないエネルギーを帯びた記号になって、つまり変化する宇宙を記号認識した瞬間に、「宇宙」も「人間自身」も「記号」(sign) という同じ範疇 (category) に組み込まれたと言える。宇宙は記号によって認識される唯物的存在である。

2. 意味論 (semantics) について

一般的に意味論 (semantics) というと記号全般ではなく、記号の下位区分である言語の意味 (meaning) を研究する学問である。しかし筆者はそのような狭義の意味論をここでは目的としていない。これまで論述してきたようなもっと広義の記号論 (semiology) と関連している意味をここでは論じてみたい。狭義の意味論は狭義の記号学 (semiotics) の統辞論 (syntactics) と語用論 (pragmatics) に対立する分野であるが、筆者の目指す広義の意味論は Saussure の用語を借りれば能記 (signifiant) も所記 (signifié) も、ラング (langue) もパロール (parole) も、統辞論 (syntactics) も語用論 (pragmatics) もさらに自然界の記号現象もすべてを扱っている。まず「意味とは何か」、次に「意味の二面性」、そして最後に「意味の定義」という順で論じていきたい。

2.1 意味 (meaning) とは何か

この意味 (meaning) の問題は、すでに記号論 (semiology) の項で論じてきたように「概念」(concept) という用語と区別して用いることが分析上重要である。つまり「概念」が辞書的で静的な意味であるのに対して、「意味」は人間の心に判断行為をさせるもっと動的な心象である。人間の物事に対する認識方法であるが、いずれにせよ人間はまず対象物を知覚することから始める。その次にその対象物について思考をめぐらし、心的現象として内面に別の意味化をさせるようにしている。当然の真理として人間は思考する際には必ず言語という記号を使用している。言語記号が無ければ絶対に人間は思考することが出来ないのである。

Edie (1976) はこのように人間がまず物事を知覚することを「対象性の意味」という項目の中で「われわれは、志向性とは、みずからの前に「対象」、つまりノエーマを思い描き保持する意識の能力である、と定義する」と用語の説明をきちんと行っている。この「対象性の意味」とは人間が記号という触覚を働かせながら自然界の対象物を知覚した瞬間の概念のことで、その瞬間後の行動はすでに「静的な意味」から「動的な意味」へと記号変化していることを再認

識されたい。

論者は重要な分析を主張する際にはそれに関係して自分の用いる用語（terminology）を絶えず定義づけてから論じるべきである。簡単に「記号」とか「概念」とか「意味」とか「文」とか「単語」とか「状態」とか用いるべきではないと筆者はと提案したい。例えば「状態動詞」などというように「状態」という語をいとも簡単に文法家は用いているが、「状態」には「動態」と「静態」の意味が含まれていることを再認識すべきである。「動」と「静」ではその意味するところに大きな相違があることを認識されたい。意味とは何かは非常に難しい問題で、Ogden & Richards（1923）が3つの範疇に分けて意味の分析をしているので以下に引用を許されたい。

Ogden & Richards（1923）：The following is a representative list of the main definitions which reputable students of meaning have favoured. Meaning is ----

A： I An Intrinsic property.

II A unique unanalysable Relation to other things.

B： III The other words annexed to a word in the Dictionary.

IV The Connotation of a word.

V An Essence.

VI An activity Projected into an object.

VII (a) An event Intended.

(b) A Volition.

VIII The Place of anything in a system.

IX The Practical Consequences of a thing in our future experience.

X The Theoretical consequences involved in or implied by a statement.

XI Emotion aroused by anything.

C： XII That which is Actually related to a sign by a chosen relation.

XIII (a) The Mnemic effects of a stimulus. Associations acquired.

(b) Some other occurrence to which the mnemic effects of any occurrence are Appropriate.

(c) That which a sign is Interpreted as being of.

(d) What anything Suggests.

In the case of Symbols.

That to which the User of a Symbol actually refers.

XIV That to which the user of a symbol Ought to be referring.

XV That to which the user of a symbol Believes himself to be referring.

XVI That to which the Interpreter of a symbol

- (a) Refers.
- (b) Believes himself to be referring.
- (c) Believes the User to be referring.

以上が Ogden & Richards (1923) の意味に関する分析例であるが、読者諸氏は A～C までのこのような意味範疇をどう理解されたであろうか。筆者には非常に理解しにくい分類になっている。それは使用されている用語がきちんと位置づけられていないからである。この用語の定義については物事の分析を論ずる際には常に注意を怠らないことが必須条件である。例を挙げて指摘するならば、上記の説明の中で使用されている用語の「内包」(connotation) は必然的に「外延」(denotation) という用語も対立して使用されるべき用語である。内包的意味に対しては外延の意味も並列させなければならない。また「記号」(sign) という用語と「象徴」(symbol) という用語は同等に用いるべきではないし、また用いるならば「象徴」は「記号」の下位区分として使用すべきである。範疇 (category) に関しても範疇 A の「固有の特質」(An Intrinsic property) と範疇 B の「語の内包」(The Connotation of a word) はどこがどう異なっているのだろうか。例えば「動物」という語の外延の意味と内包的の相違は何かと問われればすぐにその意味の範疇の違いは用意に理解できる。でもその「動物」と言う語の「固有の特質」と「内包」は何ですか、と問われれば両者の説明は同じですと答えざるを得ない。このような曖昧な分析をしてしまうのはきちんと用語の定義をせずに、また用語と用語の意味レベルの相違をきちんとしないで使用してしまうのが原因である。

上記のような範疇の意味例を列挙してしまうと、意味の定義もきちんとできなくなってしまう懸念がある。まさに論より証拠で意味の定義がきちんと出来上がっていれば上記のような意味の説明例は提示しないものである。記号の下位区分である言語の意味は辞書で説明しているような「静態の意味」と文脈 (context) あるいは談話 (discourse) の中で用いられる「動態の意味」があると言える。次の項でこの問題を論じたい。

2.2 意味の二面性

意味 (meaning) の二面性とはすでに前項で述べているように、意味にはただ単にある対象物の概念的意味 (= 辞書の意味) を表わす場合と、暗号 (code) のように送信者 (encoder) と解読者 (decoder) の間に取り交わされる何らかの反応を起こさせる文脈の意味 (= 談話の意味) を表わす場合の二つがある。また別の表現をすれば前者は「静的な意味」で後者は「動的な意味」である。しかし次の「意味の定義」の項目で分析しているように実際の意味は静的ではなく動的である。

前項で「外延の意味」と「内包的意味」という論理学の用語に触れたが、これらの意味は「意

味の本質」を論ずる場合にはまったく無関係な範疇に属していて、「記号」と「意味」との関係論ずる際にはこのような用語は邪魔な存在である。しかし言語の「外延の意味」と「内包の意味」という論理学の用語は統一して全論者が用いるべきであると強調したい。

例えば池上（1982）^{13）}は「外延」と「内包」という用語をきちんと認識しながら「包摂語」と「被包摂語」という理解しにくい用語を用いて、以下に例示するように事を一層難しくしている。筆者はその分析は間違っていると思うのだが、とにかくおかしな意味の分析を提示している。少し長くなるが引用を許されたい。

池上（1982）は「同義語を検討した時、二つの語が相互に置換可能であるかどうかということ」を基準として考えた。このような場合に対して、置換が一方方向にしか働かないというような場合が考えられる。例えば「子供」と「息子」というような場合がそうである。「自分ノ息子ガ結婚スル」という文で「息子」を「子供」に直して「自分ノ子供ガ結婚スル」と言っても文の妥当性は変わらないが、逆に「子供」の代わりに「息子」を置き換えてもいつも差し支えないかという、そうとは限らない。「自分ノ子供ニ嫁ヲ探ス」ならば「息子」を置きかえてもよいが、「自分ノ子供ヲ嫁ニヤル」のような場合には「息子」を置きかえるわけには行かない。「子供」と「息子」という語の間の意味関係はいわば一方通行なのである」と分析している。

上記の池上（1982）^{13）}の分析は「第二章 意味の類似性」の「4 包摂語と被包摂語」という項目で述べられているが、この「外延の意味」の分析は最初の「同義語」という用語の使用方法から間違っていると言える。その理由は「同義語」という用語は「外延の意味」に、ここでは池上は「包摂語」という用語に置き換えているが、他の別のレベルの用語には置き換えることは出来ないのである。「同義語」は常に「同義語」であって別の次元の用語には決してなり得ないということである。人間の「子供」という語の「外延の意味」は「息子」や「娘」である。「子供」と「息子」は同義語ではないし、「子供」と「娘」も同義語ではないのである。「嫁ニヤル」は当然「娘」のことで、「息子」なら「婿ニヤル」となる。「同義語を相互に置換させる」と言いながら「子供」と「息子」という同義語ではない語を置換させようとしているのである。

さらに池上（1982）は「上位概念を表わす語を「包摂語」、それに対する下位概念を表わす語を「被包摂語」、両者によって構成される意味関係を「包摂性」と呼ぶことにする。「包摂性」の関係が成立している場合、上位概念を表わす包摂語が存在していることも、していないこともある。例えば「父」と「母」に対しては「親」という包摂語が存在するが、「おじ」と「おば」や「おい」と「めい」といった組に対する包摂語はない。「兄」と「弟」の場合にも包摂語が欠けているので、時として「キョウダイ」というような本来集合的な意味を持つはずのものが臨時に包摂語として使われることもある」と分析している。

上記の説明もおかしな分析である。上位概念としての「キョウダイ」の下位概念、つまり外延の意味は「兄」と「弟」、「姉」と「妹」、「兄」と「妹」、「姉」と「弟」、「おじ」と「おば」

などである。また上位概念としての「イトコ」の下位概念、つまり外延の意味は「従兄弟」、「従弟」、「従妹」、「従姉妹」、「従兄」、「従姉」、「従兄妹」、「従姉弟」などである。さらに広義の解釈をするならば、上位概念としての「子供」の下位概念、つまり外延の意味は「息子」、「娘」、「甥」、「姪」、「少年」、「少女」、「男の子」、「女の子」などである。ここでも筆者は統一した用語の定義の重要性と「レベル分析」¹⁴⁾という常に同一のレベルの用語で物事の分析をする方法が重要であることを強調しておきたい。

人間はこの世に誕生した瞬間から、つまり人間が言語記号を中心に自然界を記号化した瞬間から、記号を媒介として自問自答する場合のように自分と自分の間に「意味の送受行為」をしたり、また自分と聞き手との間で「意味の送受行為」をしたりして物事の認識を行っている。このような自問自答をしている場合と他人と会話をしている場合は両者とも「動的な意味」が成立している時だと言える。「静的な意味」とは人間が自然界の対象物を知覚した瞬間の印象のことである。例えば言語の場合は人間が言語文字を見た瞬間の心象状態のことで、その文字を判断した瞬間には真の意味である「動的な意味」が誕生するのである。実際にはこの「静的な意味」は「意味」とは言えないのである。このことをもっとわかりやすく説明するならば、例えば「地球は丸い」という命題文を見て読んでもその瞬間はまだ意味は誕生していないということである。しかし人間がその命題文の真偽を判断した瞬間に意味が誕生するのである。さらに言語記号だけに的を絞って言えば、辞書に記載されている文字記号そのものはまだ意味を持っていないで、その文字を読んで判断した瞬間に真の意味が誕生するという分析である。筆者は敢えてこれを「意味の二面性」という表現で分析を試みているのを理解されたい。

このようにして「意味」(meaning)を「静」と「動」の二つの範疇(category)にする分析法は理解しやすいと言える。これに対して前項で引用しているOgden & Richards (1923)の範疇は辞書的な静的意味と文脈的な動的意思が明示的ではなく非常に理解しにくい意味の例示となっている。しかし他の箇所では使用している用語に対してはかなりの注を加えているのでその点は大いに評価したい。

再び「静的意味」と「動的意思」の内容を具体的に説明したい。まず「地球は丸い」という命題文に再登場してもらうことにする。これは「地球」という対象物を説明した立派な文(sentence)である。ではこの「地球は丸い」という文はどのような意味作用をするだろうか。大昔の人なら地球は平たいと考えていたかもしれないが、今日では子供でも地球は丸いことを知っている。つまりこの文(sentence)は誰もが共有している地球という対象物に対する概念(=意味)で、しかもその意味は辞書的かつ静的な意味である。ではここで読者諸氏に以下のことを試してもらいたい。誰かに会ったら挨拶のあとすぐに「地球は丸い」と言ってみてください。すると相手は急に不思議そうな表情をして、「ええ!？」という返事が返ってくるに違いない。そうしたらもう一度相手に「地球は丸い」と言ってみてください。すると相手は依然としてその意味が理解できないで、「何だって!？」(What do you mean by that?)と逆に質問を返してくるに違いない。相手が「その文の意味」を理解できないのは当然である。その「文」

は単なる辞書的かつ静的な意味に過ぎないからである。しかし相手と会う前から「地球は丸くない」という議論を続けていたならば、つまりきちんとした文脈（context）または「談話」（discourse）の中での発話であったならば、相手はすぐにその意味を汲み取って「そうだね。やはり地球は丸いと言えるよ」などと返事をしてくれるだろう。これは意味の伝達が可能になって「地球は丸い」という文の「静的な意味」が文脈（context）の中で「動的な意味」に変化したからである。以上のように「意味」（meaning）には「静的な意味」と「動的な意味」の二面性があることを認識されたい。

2.3 意味の定義

前項では意味（meaning）の二面性について述べたが、特に筆者の用語である「静的な意味」（＝辞書的な意味）については中島（1972）も「言語現象の分析と意味の意味」という項目の中で、「今私が現実的に「本がある」（筆者の「地球は丸い」を参照）と言ったとする。……もっと詳しく言うと私は本なる対象を意識し（表象作用）且つその対象を承認している（判断作用）、即ち本を表象しているのみならずその存在を考えているのである。かかる心的過程は「本がある」という言語表現以前に行われていることは言うまでもない。言語活動以前に既に思惟作用はあるのである」と指摘している。さらに「動的な意味（＝文脈または談話的意味）」について中島（1972）は「言語手段の意味とは、話し手の側からいえば、自分が聴き手の中に喚起せんとする心的現象、その言語手段が聴き手の中に喚起することになっている心的現象であると定義することができる」ときちんと分析している。

意味とは記号の項で論述してきているように、人間が自然界の対象物を知覚して記号分析という認識行為を始めた瞬間に「静」から「動」への意味化が発生すると言える。

改めて以下に意味の定義を試みたい。

「意味」の定義： 意味とは人間が自然界の記号を分析した瞬間に生じる心的現象のことで、言語記号では辞書的な「静的意味」と文脈的な「動的意味」があると言えるが、厳密に分析すれば後者の「動的な意味」が真の意味である。

註)『新明解国語辞典』（1988）三省堂

「意味」：①その時その文脈において、その言葉が具体的に指し示す何ものか。②その人が何かをした時の動機・意図。③意義。④趣旨。

とにかく「意味」の定義は難しい。上記の辞書の説明は①の文脈の中での意味は正鵠を射ていると言える。②の動機は意味ではない。③の意義は辞書的な意味という点では可能だが、「価値」という意味で用いたのなら真の意味ではない。④の趣旨は考えという意味と同じこれも真の意味ではない。

3. おわりに

用語の定義は簡単なようで非常に難しい問題である。本論文では「記号」、「概念」、「意味」などの用語を論者たちがどのように定義づけして使用しているかを問題に取り上げ、特に「記号」とは何かを哲学的に論じることにより宇宙と人間の問題を解明してみた。人間は自然界を記号化して、同時に宇宙のエネルギーの一部として一刻も休むことなく自然界の記号を分析して行く宿命を帯びている。記号は分析された瞬間に意味となり、つまり人間が記号の判断行為または認識行為を行った瞬間に記号は意味というエネルギー源になって、人間は宇宙という記号の中で無限なる運動を続けていくのである。

最後に本論文を読み終えてくれた読者諸氏に心から感謝し、同時にこれを筆者の最後の紀要論文としたい。

注

- 1) 命題とは論理学の用語で物事の判断(真偽)を言語で表す用語で、一般的には主語(subject)と述語(predicate)から成り立つ形式のことである。
- 2) 筆者の用いる概念とは、サピア(Sapir)やソシュール(Saussure)が規定している用語の概念とは異なって、物事の理想的に統一された意味を有する記号のことである。例えば「文」(sentence)という用語は統一された意味規定が実現されていないので、その説明は千差万別で誤解を生じやすくなっていて、未だに正しい概念が確立されていない。
- 3) 語彙(vocabulary)とは一定の範囲で使用される語の集合または総称である。
- 4) 梶原(1992)、(1993)、(1994)、(1998)、(2004)参照。
- 5) 三上章(1960『象は鼻が長い』くろしお出版)。
- 6) Barthes R. 『モードの体系——その言語表現による記号学的分析』(1972) 佐藤信夫訳 みすず書房。
- 7) Peirce (1881) 『パースの記号学』米盛裕二著 (P. 109-110) 参照。
- 8) 唯心的な実存主義者で、人間の行動は「神」や「絶対的な理性」などが決めるというそれまでの実存主義の思考方法に対して、それは「人間自身」が決定すると言って、世界中に大きな影響を与え、社会問題などのデモ(示威運動)に積極的に参加したりした。その瞬間の人間行動はその人間が決定するという思考方法は、なぜそのような行動を人間がするようになったかの周囲の環境を重視する唯物的な真実追及と対することになり、極端に批評すれば過激なデモ活動をして権力者に都合よく排除される理由を与えてしまう瞬間的なその場主義の誤った行動を喚起してしまう弱点がある。とにかくポーボワール女史と共に多くの人々に影響を与えた実存主義者である。
- 9) 唯物弁証法とは、この宇宙には一瞬たりとも同じ状態で存在するものは無く、物質を構成している粒子の世界のようにすべてが刻々と変化していて、それを矛盾と称して、世界はその矛盾によって変化していると思える思考方法である。また「月の石」のように人間がそこに行って唯心的に知覚しなくてもすでに石は唯物的にそこに存在しているとし、つまり心よりも物に重きを置いて物事を相対的に見る思考方法のことである。世界は矛盾を通じて螺旋形のように絶えず進化しているので、人間はそれを主観的に見るのではなくて客観的に物事に重きを置いて思考する方法である。社会問題でも、どんな悪い社会でも折ることによって心を変えて自己満足する方法を取るのか、それとも悪い社会をより良い社会に変えることによって満足した心に変えて行くのか、が常に問われている。

前者は宗教を信ずる方向へ向う唯心的な思考方法で、後者は変革運動へと向う唯物的な思考方法である。

- 10) Chomsky N. (1965a) *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT. 参照。
- 11) 梶原 (1997) 「言語生得説と英会話教育」『紀要』論文 文京学院短期大学英語英文学科
 —— (1998) 「言語の普遍性：命題とモダリティ」『紀要』論文 文京学院短期大学英語英文学科
 —— (2003) 「語彙力と会話力の相関関係について」『紀要』論文 文京学院大学外国学部・文京学院短期大学英語科
- 12) 筆者の用語。人間が世界中のどこの言語も獲得できる能力は、統語的文法能力ではなくて、対象物には名前が付いていると認識できる「記号知覚装置」(SPD=sign perception device) という能力が脳細胞に生得的に組み込まれている、という筆者の仮説である。Chomsky の「言語獲得装置」(LAD=language acquisition device) に対応する用語である。
- 13) 池上義彦 (1982) 『意味の世界』第二章 参照。
- 14) 筆者の用語で、何かを分析する際には常に同じレベルの用語で分析すべきであるという分析方法である。例えば日本語の「象は鼻が長い」という文を分析する場合に助詞の「は」は「主題」で「が」は「主格」であるなどという「意味」と「文法＝統語」の用語を同じレベルで使用している方法は完全に間違った分析方法であると断言したい。

参考文献

- 『現代言語学辞典』成美堂
 『新明解国語辞典』三省堂
 『新言語学辞典』研究社
 『哲学辞典』青木書店
 『ソシユール小事典』大修館書店
 『チョムスキー小事典』大修館書店
 池上義彦 (1984) 『記号論への招待』岩波新書
 (1982) 『意味の世界』NHK ブックス
 Eco, U. (1976) 『記号論 I & II』池上嘉彦訳 岩波現代選書
 Edie, J.M. (1976) 『ことばと意味』滝浦静雄訳 岩波現代選書
 Gilson, E. (1909) 『言語学と哲学』河野六郎訳 岩波書店
 Herder, J.G. (1959) 『言語起源論』木村直司訳 大修館書店
 Kwant, R.C. (1965) 『言語の現象学』長谷川宏・北川浩治訳 せりか書房
 Lyons, J. (1960) 『構造的意味論』成瀬武史訳 文化評論出版
 Martinet, A. (1962) 『言語機能論』田中春美・倉又浩一訳 みすず書房
 Ogden & Richards (1923) *The Meaning of Meaning*. A Harvost HBJ Book
 Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace & Co.
 中島文雄 (1972) 『意味論』研究社
 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
 米盛裕二 (1981) 『パースの記号学』勁草書房